

生群 367 名；短大生群 260 名；教養部学生群 978 名；それに美術系学生群 70 名で総計 2375 名。

結果と考察 年齢別にみた各群の平均得点は、中学 1 年生群 55 点，2 年生群 58 点，3 年生群 58 点；高校 1 年生群 61 点，2 年生群 62 点，3 年生群 61 点；短大生群 62 点となっている。そこでは各グループの得点が学年の進行と対応しており，中学生群は一般に低く，中でも 1 年生群の得点が最も低くなっている。しかし，高校生群の得点は急に上昇しており，短大生群と同じ段階にまで達している。一般学生群（名古屋大学教養部学生；男子 879 名，女子 99 名）と美術系学生群（三重大学美術科学生・名古屋デザイン研究所学生；男子 27 名，女子 43 名）についての各グループの平均得点は，一般学生群 60 点（文科系男子 59 点，理科系男子 60 点，文科系女子 63 点，理科系女子 65 点），美術系学生群 67 点（男子 68 点，女子 66 点）であった。美術系学生は一般学生より有意に点が高く，美術系学生の方が高い得点の方に片寄っていた。また，折半法により一般学生群内の相関をとると  $+0.91$  であり，一般学生と美術系学生との相関は  $+0.62$  であった。これは，このテストが両群を識別するのに有効であることを示している。つぎに，一般学生群の志望別では，男子も女子も理科系の方がより得点が高く，性差に関しては，文科系も理科系も男子に比べて女子の方が高くなっている。これは，美術系学生群で男子の方が高い得点を取っているのと対照的である。

今後の問題として，より大きな差異と識別を得るテストを改良することが望まれるが，より多くの資料を多くの地域，多くの専門家から得て標準化をおし進める予定である。

#### 青少年の望ましい人格形成過程における 家庭環境要因の分析

研究代表者 山下 俊 郎  
(東京家政大学)

われわれは，青少年の人格と家族全体の人間関係との間に真に有意な変数とその構造を明らかにするため，4 班にわかれ基礎的研究を行なった。

第 1 班 不適応青少年の心理的行動特性とその原因の分析。ここでは，登校拒否の問題をとりあげ，関連研究の検討や，中学生に関する SCT による予備的調査から，その原因は，母子分離の不安，子ども自身の神経症時症候，家庭内における父親の力の弱さなどに関連して

いた。

第 2 班 父—母—子関係の類型論的研究。先の試験研究，父—母—子関係の分析において抽出した因子の再検討を行ない，さらに諸研究で用いられている質問項目を検討した。そして，質問項目の派生した諸領域を検討して家庭内で予想される人間関係を想定し，子どもの人格形成に直接的，間接的に影響を及ぼすといった条件を加味して，親—子間の意識面と行動面に関する 106 個の質問項目を作成した。

第 3 班 核家族および拡大家族における夫婦関係の比較研究。家族関係の中心的要素である夫婦について，その相互作用を分析すると同時に，問題点が指摘されている拡大家族に関して夫婦関係に影響する問題点を究明した。つまり，①夫婦の幸福度，②嫁の姑に対する意識，③嫁—姑の共感性，④嫁の情緒を測定・調査するための調査票を作成し，幼稚園児を持つ核家族の夫・妻，拡大家族の夫・妻・姑を対象に，住宅地域，商店街地域において調査した。その結果，若干の地域差や家族形態差が見出されたほかは大差はなかった。しかし，拡大家族の問題性的一端もうかがえた。

第 4 班 子どもの同胞構造および出生順位と親子関係。就学前児童を持つ親，とくに一人っ子，および二人っ子の親と子の関係が，出生順位や同胞の性的構造によってどう変るかを明らかにするために，質問紙法，面接法によって地域別に予備的調査をした。その結果，親子関係は出生順位や同胞の性的構造によって著しい相違が見られた。さらに，この相違は子どもを一人，または二人に留めている社会的・経済的要因，親の夫婦観，教育的理想，社会観などの影響を被り，これらの諸要因間の相互関係の分析のための基礎資料を得た。

以上，初年度にあたって文献的研究を中心に基礎的予備調査を行ない，問題点，今後の研究方法上の示唆を得ることができた。

#### VTR による授業過程の心理学的研究

研究代表者 藤野 武  
(北海道教育大学)

1. 目的 VTR および ITV 装置，並びに集団反応計測装置などの諸設備を利用して，授業の客観的徹視的な分析研究を行ない，新しい授業分析法を開発し，それをもって実際に多くの授業を分析して，従来の主観的観察や印象的評価では得られなかった，教授—学習関係の